

弟を泣かせるくらいなら、自分には諦めてしまおうだろう。でも、じゃあ、どうしてあんなこと？

「まかりまちがつちやうと、マリクもバシアさんも、僕も泣くことになつちやうかな…バシアさんに、ちよつと落ち着いてもらわないと」とはいえ、どうしていいかわからない。何より安道は、自分の心が不思議だった。

「なんで、僕」嫌じやないんだろう。普通だつたら、あんなこと言われたら、いつぺんで嫌いになつてしまうはずなのに、初々しい羞じらいぶりに、むしろ心を動かされてる。

ああ、こんな時、護だつたらどうするだろう？

「バシアさんを迷わず食つちやうな。でもつて、それをマリクに言つちやう。で、全部おしまいだ」それは嫌だな、と安道は思う。マリクのことは好きだ。結婚話が出たら腹が立つぐらいには、だが、異父兄と複雑な関係になつて泣かせるくらいなら、今のうちにきつぱり別れても…いや、それも変な話だな？

「たぶん、マリクは何も知らないんだろうし」知つたら飛んでくるはずだ。兄と恋人を共有することを了承でもしていない限り。「そういうタイプじゃないよな、マリクも。わかんないけど」

まだ、倦怠期に入るほど長くつきあつてもいない。複数の妻を娶るのが当たり前前から来ているから、安道とは感覚が違う可能性もあるが、もしそうだとするなら、マリ

クの方が自分から、「実はバシアも」というだろう。「それとも単に、バシアさん、僕の反応を見たかっただけなのかな」弟の恋人がどれだけ淫乱で、誘惑に弱いか知りたかつた、とか？

「どうだろう？ そんなこと試して、何になる？」マリクは可愛い。こちらから誘うと喜ぶ。誘われるより誘う方が好きなので、それが楽しくてつきあつている部分もある。だが、バシア・バスイールなら、用があれば向こうから来る、こちらから行く必要はない。だいたい、本気で落とす気があるなら、手口はもつているはずだ。あつという間に陥落させられることだろう。

安道はベッドから出て、シャワーを浴びた。「で、僕はなんで落ち着いてるんだ？」単に、好かれてるのが嬉しい？ のかな？

もしかして、背徳感に酔つてるとか？

いや、それつて何に対して後ろめたいんだ？ マリクと結婚してるわけでも、まして一緒に住んでるわけでもないのに？

安道は身体を乾かし、台所で朝食の準備を始めた。ラジオの米軍放送が、昔の曲を流している。ハンク・シカロー作曲の「ノリータイム」だ。安道もつられて、歌い出す。タイトル通り、君に割いてやる時間なんかはないよ、という皮肉な歌だが、子役あがりのアイドルの発声は美しい。少しかすれた高い声で「The grass is all w a a y s g r e e n e r g r o w i n , o n t h e o t h e r s i d e .」と歌う。隣の芝生は青いだろうけど、僕のところへ逃げ込まれても困ると。

「…：：：そうか、わかつてててからかか」バシアにとつての安道は隣の芝生で、安道にとつてのバシアも隣の芝生なのだ。だか

ら少し、よく思える。バシアがマリクより巧いか、相性がいいかどうか、今の時点でわかるわけもなく、だから都合のいい夢を見られる。そこまでお互いわかつているから、一歩を踏み出さないでいられる。「バシアさん、すこし心が弱つてるのかもしれないな」

自分に頼りきりだつた弟が、冴えないヨレヨレの日本人に夢中になつて、妙に張り切つている。納得できない現状に理由を求めて、弟の恋人を美化している可能性はある。だとしたら、彼の仕事を肯定してあげられれば…？

「不思議なものだよな」

バシアさん、好きなタイプだし、つきあうのもマリクより楽そうなのに。「護以外は、誰でも同じだと思つてたのにな…：：」

そうじゃなかつたな、と思ひ浮かべるのは、やはりマリクの笑顔の方で…。

「ないよ」

「いやいやいやいやいや」

「何を比べてるんだ。」

「いにくる好きタイズだからつて、バシアさんと、どうこうなるとか、ならないとか、ないから。」

「どうしよう…：：」

「最初に会つた日から、バシアに好感を抱いていた。頭の回転が速いし、話がストリートで筋が通つている。安道は直球を投げ込まれるのも、道理にも弱い。」

「護とは、違ウタイズ、なんだけどなあ」

「誰はわかりやすかつた。面倒臭い兄貴肌で、機嫌はぜんぶ顔に出る。モチろけるどつきあう相手は選ぶから、「おまえが必要なんだ」と囁かれると、どんな淫らごとをされても、抵抗できなくて…。」

「いやいやいやいやいや」

「どうしようあれは、真面目な告白なんだろう。」

「だつて、バシアさんて、策士じゃないし」

「が、内心、動揺していた。」

「たぶん」と、その場をごまかして別れた。

「真意をはかりかねて、「マリクが僕に夢中だから、それで悪わされてるだけですよ、思いもよらない返事が返ってきた。」

「…：：：どうやら私は、あなたにやましい気持ちを抱いているようです」

「いた。マリクに何かあつたのかと思ひ、声をかけてみると、物思いにふけつ

昨日、安道が定時で帰つてくると、バシアがアパートの階段の前で、物思いにふけつ

「…：：：あ、あれ？」

「安道は首をひねった。」

「今、なんの夢をみていた？」

「夢だよな？」

「現実ではない。身体にはまったく違和感がない。むしろ目覚めは爽やかで、ぐつすり眠つたという満足感の強い。」

「というか、昨日の夕方のあれが、夢かな？」

「それなら」

「いや、その、どうしても、では」

「嫌ですか、どうしても」

「バシアは安道の耳元で低く囁くように、

「だめですよ、バシアさん、そんな冗談」

「そつと抱きしめられて、安道はため息をついた。」

「え？」

「あなたに触れたい」

「どうしたんです、バシアさん？」

「アンドー」

「…：：：あ、あれ？」

「安道は首をひねった。」

「今、なんの夢をみていた？」

「夢だよな？」

「現実ではない。身体にはまったく違和感がない。むしろ目覚めは爽やかで、ぐつすり眠つたという満足感の強い。」

「というか、昨日の夕方のあれが、夢かな？」

舌で舌を絡め取られて、言葉が出なくなった。服を乱され、滑り込んできた掌に翻弄されて、トロンとなって見上げていると、浴室に連れ込まれて何度も選かされて…。

「それなら」

「いや、その、どうしても、では」

「嫌ですか、どうしても」

「バシアは安道の耳元で低く囁くように、

「だめですよ、バシアさん、そんな冗談」

「そつと抱きしめられて、安道はため息をついた。」

「え？」

「あなたに触れたい」

「どうしたんです、バシアさん？」

「アンドー」



鳴原あきら

隣の芝生

☆後書きにかえて☆

『バシア・バスイールの告白』シリーズは、バシアさん視点の物語なので、「アンドーの方はどう思つてるんだ？」を書いておこうかな、と考えたのがこの話です。さて、一ページ目の注意書きを読まずに、このオマケ冊子から読んでしまつた方、「なんだこれ？」だつたでしよう？ というか、読んだ後でも「なんだこれ？」かもしれないませんが、このアンドーは天然です。盗聴されているの忘れてない、君？

アラブBし『それから』の途中から登場したバシアさんですが、第三者として二人にツツコミを入れるキヤラなので書きやすく、読者の方にもそこそこ人気があつて、私もモメインの二人よりはババシアさんが好きだったりするので、年明けに怪しげな妄想話を書いてみたのですが、これセルフ二次創作にしても、公開していいものかという、ためらいが生じまして。

というのも、弟の恋人を奪取るとか共有するという展開になると、ちよつと近親相姦要素が入つてしまう気がして…：：：往年の読者の方は、『彼の名はA』シリーズに、その風味があるのをご存じでしょうし、ゲーム系の二次創作でも、妹×兄とか、兄妹弟子物とか書いていたりしまして、つまり自分の中では根深い嗜好ではあるんですけども、禁断度が一気にあがつてしまうので、人前に出していいものなのかという、ためらいが凄くて…：：：バシアさんのように悪夢を見るほど迷いました。

しかし、それだけ迷つたけど出てしまつた…：：！ バシアさんもアンドーも、罪深い…：：！

初出：Privatter 20170729
 〒1トでも公開中
 http://www5f.biglobe.ne.jp/~Narisama/arab_ntr.html

『隣の芝生』 鳴原あきら
 2017年8月13日発行
 発行者 恋人と時限爆弾
 表紙写真 sharon christina rovrik (CCO)
 連絡先 http://www5f.biglobe.ne.jp/~Narisama/

奥付



81